

三ノ句合

上

あつちのあつちをわらうと
うゝはちと六葉のあつち
わらうひなり

山口素堂は風月の
才とてみく清世の閑
人なりはうろ口とてみく
詠を詠れぬとてみくへ
西行上人のうみとてみく
川の詠に判し詠ふ

三十六番の句合ありは
茶をこのみくはちの
みを初茶の湯によせ
川を詩を詠ふはちを神
とてみくはちを詠ふ
初れはちを詠ふはちを

たることをしり、とゞまるとをし
れば、蕭然としてわづらひなし。

山口素堂は風月の才にとみて、清
世の一閑人なり。日ころ口ずさ
みたる俳諧の句を、いにしへ西行
上人のみもすそ川の詠に判し給
ふにならひて、三十六番の句合あ
り。常に茶をこのみて、とくく
の水を初茶の湯によせ、宮川は詩
を粧ふ鏡を神こゝろにうつした

中々根は鹿の音をきく
 ゆく鹿の音をきく
 つとせ予が庵崎の有
 無庵を問れし時
 瓢枕宗祇の蚊屋はありやなしや
 と申されしに
 秋山ぬき葉さへ塵塚
 脇をつけぬ 沾洲序令郁文など
 わすれて 一順あり
 書林杉浦氏持より
 もめむし予に序せし
 予はちりばめむよし予に序せ

り。をりく 都の花にあそび、西
 海の島根に鹿の音をきく、ゆく所
 佳吟多し。一とせ予が庵崎の有
 無庵を問れし時、
 瓢枕宗祇の蚊屋はありやなしや
 と申されしに、
 秋山ぶきの葉さへ塵塚
 脇をつけぬ。 沾洲序令郁文など
 ともなはれて一順あり。 わすれ
 てもらしつ。 右の句合、書林杉浦
 氏梓にちりばめむよし、予に序せ

孫もいふ中り今迄山口公ね
 雷堂もたゞ教はいるに
 いまこゝへ
 今の常交をおもひよせて
 玉笥山人 祇空叙之

よとあり。くはしく百里が奥書
 にあれば、それにしもおよばずと
 申けれど、山口翁、雷堂もなき數に
 いるに年あればと、いなみかた、
 その舊交をおもひよせて

玉笥山人 祇空叙之

七そぢにちかき秋の頃、わらは病にかゝりて、三途瀬川を二瀬もこへなんとせしが、立歸り、病の間ある時、むかしいひ捨たる狂句どもを、情おもひ出て、自の句を左右にわかし、西行法師の御裳濯川のまねして、三十六番の句合となし侍れど、今の代に俊成卿とたのむべき人なければ、判者も又素堂なりぬ。其角が句兄弟は、他の句に自の句を寄せ合ての名なり。今此句合は一腹一生にして、多くはみそぢ前後のふることなれば、あかしくもつたなくも見給はんかし。

かつしかの隠士

素

堂

一番 歳朝

左

とくくの水まねかば來ませ初茶湯

右

宿の春何もなきこそ何もあれ

判に曰。西行法師をしたひての句合なれば、第一番に汲ほす程もなき住居かなと詠じたまふよし野のおくの昔清水を出されけるにや。二月堂のわかさの水もよぶに應じてわき出るといへば、遠くとも來るまじきにあらず。

右、何もなきこそとあるは、有無の無にてはあらざるべし。此無にはあらゆる物を備へて、胸中の楽しみはかり難し。よつて勝負をわかつたず。

二 番 柳

左

西國下りの頭周防長門の間の堤に大木の柳ありけるを

右

胴をかくし牛の尾戦ぐ柳哉

何となう假名書習ふ柳かな

左、大木の柳言外にあらは也。

されども右のやなきに立並ぶべきにあらず。

三 番 梅

左

篋の晋目を道びくや藪つばき

右

谷川に翡翠と落る椿かな

左、田舎わたらひに有けしき也。

右、翡翠の魚を見て飛入たる

いきほひに梅の靜に落合たる拍子、非類なきによつて右を勝とす。

四 番 紀行

左 大磯に

あれて中々虎が垣根のつぼ藁

右

命長し其如月の前の顔

左、なだらかにひくだして

文字餘り耳にきはらず。

右、西行の顔を見しられたるやうにて、をかしく侍れど、

死して亡ざるものは命長し、

といへるころを持て見れば難ずるにおよばず。よつて持たるべし。

五 番 花

左

木の間ゆく被に散し櫻かな

右

所以ありて彌生の頃東武へ下りけるに

ふんぎつて都の花にくたりけり

左、都のすがたながら、しみて稱するにたらず。

右は五文字におほくの心をこめて、一句すこやかなり。洛陽の信徳や、もすれば此句を

いひ出しけると也。判者も又
信徳がこゝろをこゝろとす。

六 番 花

左 大和めぐりせし頃よしの山
にて

是つらよよし野の花に三日寐て

右 三輪

至れりや杉をはなとも社とも

三輪の神はやしるなし。なき
こそ神のかたちなりけれの心
なるべし。

左、論語をよみて是つらの人
といへるこゝろばへにや。さ
れども三輪の至りには及がた
し。

七 番 花

左 粟津が原にてはせをの探を
弔ひて

志賀の花湖の水それながら

はせを行脚に出て久しく歸
らざりしころ

いつか花に小車と見む茶の羽織

八 番 櫻

左 福原

左、粟津が原はむかひに志賀
の花、折とらば手ふさに氣が
るの心をと、前の湖水をそ
れながらといへるにて、手向
になすぞ加茂川の水、とよめ
るこゝろをもとるなるべし。
右は司馬溫公の花外の小車ひ
さしく來らずと堯夫をまたれ
しこゝろと見えたれども、花
のあたりの太山木におなじ。

榮畠の爰が左近のさくらかな

右 豊國にて

たれか見む櫻のころの野人參

左、いかめしく築立られし新
都の迹も、今榮ばたけとなり
て、感慨すくなくらず。
右も又朝鮮までしたがへたま
ふ名残に、藥種にも野菜にも
ならぬ野人參の生出たるとや
なぞらへて持たるべし。

九 番

左 雲雀

朝虹やあがる雲雀のちから草

右

夕風に見うしなふまでは雲雀哉

左、高くあがるこゝろは明か
なり。

右は何の手もなくてよろし。

殊に見うしなふまでは、と文
字の餘りたる處に意味あるに
や。右尤爲勝。

十 番

左 落花

餘花ありとも桶死して太平記

右 惜春

春もはや山吹しろく苙にがし

左、餘花は夏の題にて侍れど
も、一句を味ふれば、落花の
こゝろ明らか也。むづかしけ
れども一格あり。

右も春ををしむこゝろ淺から
ず。よき持たるべし。

十一 番 初夏

左

垣根やぶる其わか竹をかきね哉

右

村雨につくらぬ栢植の若葉かな

右、栢植はおかしく作る物の

やうになり来るを、おのづか

らなる若葉にむら雨のけしき

さへそひて、うるはしき姿

也。

左も八雲の神詠をかりて一ふ

しなきにあらず。これ又持に

きたすべくや。

十二番

左 鎌倉一見の頃。

日には青葉山ほととぎすはつ鯉

右

夜鯉やまたじとおもへば夢の露

左、目には青葉といひて、耳

に郭公、口に鯉、とをのづか

ら聞ゆるにや。かまくら中の

景色これにすぎず。

十三番

左 運

我はちす梅に鴉のやどり哉

右

鬘宗祇池に蓮あるたぐひかな

右、むかしの人は罷を貴びて

池に蓮なきはよき男の難なき

がごとしと歌にもよめり。こ

とに宗祇の罷は香を留んがた

めときけば、蓮のたぐひとに

や。

左、君子の運を愛するは、梅

にうぐひすの宿るにおなじ。

我運を愛するは不相應と聞ゆ

無勝劣。

十四番

左 運

一葉浮て母に告ぬる蓮かな

右

開かんとするとき筆に似た

己^{おのれ}つ

ぼみおのれ^{おのれ}盡て蓮かな

左、運、清徳が兩關集孝の部

に出せり。山谷詩に、運を見

て母の慈をおもふとは實の事

をいへり。一葉の浮みたる所

をつけたるも、猶孝のこころ

なるべし。

右、あまたの中に、もやうに

はさもあるべし。左におよば

ず。

十五番

左 宇治

璧

喜撰法師はたるの歌も詠れけり

右 瀬田

水や空うなぎの穴もほし螢

左、都の辰巳と詠る外に、基

泉と文字かはりて兼の歌あり、

よめる歌おほからぬよし、貫

之さたせられ侍れども、爲兼

卿、宇治山の喜撰にして、玉

葉集へ入たまふ。此論にかゝ

はらず、右のほたるをまされ
りとす。

十六番

左 河骨

河ほねやつゐに開かぬ花ざかり

右 澤瀉

をもだかや弓矢立たる水のはな

左右ほまれもなく、そしりも
なし。

十七番

左 箱根

峠涼し沖の小嶋のみゆ泊

右 不二

山姫や鹿子白無垢土用ぼし

左、實朝卿のはこね路をけさ
越くれば、と詠じたまふを、

峠のしゆく泊りにとりなされ
て一興あり。所は山路ながら、

沖の小嶋のと待れば、泊の字
を用ひてもくるしかるまじき

にや。

右、夏の不二さも有べし。ふ

じといはずとも其心明らか也。
驛劣なし。

十八番

左 木曾路を登りける頃。

夕立にやけ石涼し^{木イ}浅間山

右

鴨の巢や富士のうへこぐ諏訪の池

右、すはの池には富士のかけ
うつるといへば、其うへに巢

をかけたるにや。

左は一句すこやか也。これ又

持ならんかし。

十九番

左 愛宕山に一宿のころ。

しら雲を下界の蚊張につる夜哉

右 比叡山の絶頂にて。

山すゞし京と湖水に眼三ツ

左、あたご山は蚊帳^{いイ}つらず、

帷子着ず、夏しらぬ山ともい

へり。白雲寺と號すれば、其

よせもあるにや。

右、山といへば叡山たるも勿

論の義なり。兩眼の外に心眼
をつけて見よとにや。山の高
さも句ごしらへも、甲乙なか
るべし。

二十番

左

みな月三十日加茂川にあそ
びて。

みたらしや半流るゝ年わすれ

右

千鳥聞し風の薫りや蘭奢待

右、東山義政公、鴨河へ千鳥

聞に出たまふ。おなじく千本

道貞といふ者も、袖に蘭奢待

をたきて出けるよし。義政公

開付給ひ、袖香爐を御取かは

し有て、今の世に大千鳥小衛

とて名物たり。しかれども左

半年の年わすれ、こゝろこと

葉調ひ待れば、勝たるべし。

二十一番

左 薄

三日月をたはめて宿す薄かな

右

とや小野のお通が花すゝき

左、こゝろなき物に心を付る體にや。

右、一體ありといへども、左のすゝきにおよばず。

二十二番

左 西瓜。

西瓜ひとつ野分をしらぬ朝哉

右 南瓜。

南瓜やすつしりと落て暮淋し

左、草々はふしたる野分の朝に、西瓜のひとり動きなきさま、見るが如し。

右、南瓜の落て、さびしさをいやましけるにや。西瓜のあした、南瓜の夕、對なるかな、對たり。

二十三番

左 西國下りのころ。

さびしさを裸にしけり須磨の月

右 明石。

朝霧に歌の元氣やふかれけむ

孔子は四時の元氣とあれば、人尤も歌の聖なれば、かくいへるにや。左も一興はべれば、おとるべきにあらず。

二十四番

左 玉津嶋。

霧雨に衣通姫の素顔見む

右 いつくしま。

回廊に汐みちくれば鹿ぞ鳴

左、西湖の雨のけしきを、美人のよそをはぬ時に詩人のさたし侍れば、素顔といへるにや。

右、いつくしまの景氣は、回廊に汐のみち來る時なるべし。あしべをさして田鶴鳴わたるのおもかげもそひて、玉津しまの雨のけしきよりはまさるべくや。

二十五番

左 甲斐が根にて。

ほぞ落の柿の音きく深山かな

右

晴る夜の江戸より近し霧の不二

左、音なきより、かへつてさびしさまさりけるにや。

右、めづらしくは侍れども、ほぞおちのかたまさるべくや。

二十六番

左 むさしのゝ月見にまかりてかへるさに。

袖みやげ今朝落しけり野路の月

右 むさし野の薄を手折て大佛の前に耳かきをひろひし事を思ひ出で。

宿に見るもやはり武蔵野の薄哉

此番判なし。おもふに翁あやまつて其辭をもらすか。

二十七番

左 石山。

雲半山石を残して紅葉けり

右 西山の茸狩にいざなはれて。

茸狩やひとつ見付し闇の星

左、石山のいしは尋常の石にあらず。雲もこゝろして、半山おほひたるにや。古き歌にもみちぬもみちても侍れば、紅葉けりも難ずるに及ばず。右、ほしひとつ見付たるよの、といふ歌をとりて、茸狩の情をよくうつせり。左におさくおとるまじきか。

二十八番

左 蓮實

蓮の實の泥鶯をうつ何こゝろ

小野川洛陽に住所とて登りける頃、予も又其心ざしなきにしもあらず。

右 はすの實よとても飛なら廣澤へ

左右の蓮實あまれりや、たらずや。

二十九番

左 みのむし

簀むしの角やゆづりし蝸牛

右 隣家の僧行脚に出て久しく歸らざりしころ

みのむしやおもひし程の底より

左、清少納言、みのむしおにの子なるよし申侍れば、角の有べきに、かたつぷりにゆづりけんとなや。右、康賴入道の都歸りのころ思ひしほどはもらぬ月かげ、と詠じたまふをおもひしほどと云て、猶荒たるけしき有にや。可爲持。

三十番

左 舜

有明も舜の威に氣をされぬ

右

あさがほよおもはじ鶴と鴨のあし

左、終夜かゞやきたる月も、明がたになり、朝がほのしほしのさかりに、けをされたるにや。世上のありさまもかくの如し。右は莊子に鶴のあし長くとも

切らばなくべし、鴨の足み

じかくどもつがば鳴ん、といふこゝろをとりて、朝顔のさかりすくなきをなだめたるにや。有明のかたこゝろふかきやうに侍れば、勝たるべし。

三十一番

左 獨樂

我舞て我に見せけり月夜影

右 十三夜

漢土に富士あらば後の月見せん

左、かくれたる所なし。

右、もろこしには後の月見のきたなし。我日の本の風雅に富るこゝろをいふなるべし。しかれども、獨樂の舞なを見どころあり。

三十二番

左

忍の岡のふもとへ家をうつしける頃

塔高し梢の秋のあらしより

右

鮭の時宿は豆腐の雨夜かな

左、梢の茂りたるうちは、塔も見え隠れなるべきを、秋のすべよりまばらに成て、嵐のうちより塔の生出たるありさま、さながら露出せるがごとし。

右も蘭省のはなの時もさびたる體、しるておとるべきにあらず。

三十三番

左 落葉

寒くとも三日月見よと落葉哉

右

松陰におち葉を着よと捨子哉

左右ともにとろなき物に、こゝろをつくる體、勝負を分たず。

三十四番

左

天の原よし原富士の中ゆく時雨哉
右 三保夕照

網さらす松原ばかりしぐれかな

左、文字餘耳にたゞず。不二の中ゆくなどおもしろし。

右もしぐれといひて、夕照のけしき明か也。よき持たるべし。

三十五番

雪

左 近江八景の内比良の暮雪を

いふ

暮おそしつる賀の津まで比良の雪

右

炭竈や猿も朽葉もまつも雪

難兄、難弟。

三十六番

嚴暮

左 大晦日

和布刈遠し王子の狐見にゆかむ

右

鳴戸磯渦まく脣くれはやし

左、めかりの神事は、大晦日の夜半ばかりのよし、遙の西國に待れば、當國のきつね見にゆかんとや。年浪のはや

き事、鳴戸よりも早しいひて、世中をわたりくらぶる歌のこゝろもこもりて、一巻の軸といひ、意味すくなくらず。右尤勝たるべし。



御裳濯川には、

みや川の流をそ

へられたり。よ

つて狂漢の句を

對し、十番とし

て

是をくはふ。

御裳濯川には

みや川の流をそへ

つて狂漢の句を

對し、十番とし

て

是をくはふ

其 一

梅月詩、姿見

右 悼少長子

柱さしや鹿柴の中よりこぼれ梅

左、梅月は誠に詩を粧ふ鏡な
るべし。

右、少長子は名高き七三事に
や。名香にたとへられたりと
も、誰かすぎたりといはむ。

左勝たるべし。

其 二 花

左 よし野山夜興

白雲へ花、燭、暈

右 よし野川にて

鮎小あゆ花のしづくを乳房かよ

左、日月の笠を暈と申侍れば

花のぼんぼりさもあるべし。

右いさぎよくははれども、

白雲におよばず。

其 三 花

左 初瀬山

無^へ價^へ花^へ開^へ張

佛^へ黄^へ金^へ一^へ枚

右

宿からん華のくれなは貴之の

左、六月清風を買ば價なから
ん、のころなるべし。

右、買之ははつ瀬の申子なれ
ば、宿坊も有ぬべし。の留り
は古き歌にもわづか一二首な
らては見え侍らず。めづらし
くははべれども、開帳のかた
勝ぬべし。

其 四

左 はりまめぐりせしころ

牛^へ行^へ花^へ緩^へ緩^へ

右

遅き日やしかまのかち路牛で行

雨^へ牛^へ無^へ遅^へ遅^へ

其 五 初夏

左

土^へ龍^へ蹟^へ竹^へ子^へ

右 洛陽の花終りける頃

亦是より若葉一見と成けり

(板本下五を「成にけり」と
すれど誤なるべし)

左、蹟の字よろし。

右は其角が句兄弟に見えたり。
下の五文字異風ながら、不^レ爲^レ
不可。可^レ爲^レ持。

其 六 蓮

左

磔^へ玉^へ風^へ蓮^へ曲

右

浮葉卷葉立葉折れ葉とはちすらし

左、露といはずして、玉を磔
とあるも、おもしろし。

右の蓮はもやうに出されたる
と見えたり。風蓮に及がたし。

其 七

左

綿^へ花^へ蘭^へ落^へ子^へ

右

棚橋や夢路をたどる蕎麥の花

左、綿の花はまことに蘭のは
なの面かげあり。そばの花は
夢中に物を見るに似たり。な
ぞらへて持たるべし。

其 八

左

鬼^へ燈^へ姫^へ一^へ口

右 長崎にて

珠は鬼灯沙糖はつちのごとく也

左、珍らか也。

右、阿房宮の詞をかりて、所
がら其多きをいふなるべし。
姫が一口、いさゝかまさるべ
き歟。

其 九

左

十月^へ爐^へ顔^へ見^へ

右

茶の花や利休が目にはよし野山

左、十月はといひて、霜月征

言談の顔見せ、なづからあらは也。
右、古風ながらしにたゞず。

其 十

左
盤レ吳 西施乳

右
名をとげて身退しや西施乳もどき

左、盤の字意味あるにや。陶朱公西施をつれて身しりぞかれしを、河豚もどきはよき見立也。吳越春秋のかしら書とすべし。勝負なし。

右六の句合、并二五の追加、かつしかの素隠士、みづから舞、みづから鞍うつて、老のおもひでとせり。ある人其古めかしきを笑ひ、且今やう姿のきこえぬもいかにぞやと、他の非をやめり。答いふ。もろこしにも盛唐晩唐の品あり。我日の本にもあるひは花の過たる時有。實の過たるもあり。また花實相應の時節もありけるにや。たとへば夏來りて綿をぬき、冬來りて衣を襲ぬるがどし。時のいきほひいかんともするとなし。汝は汝をせよ。我はといひてやみぬ。

俳 聯 五十韻

足袋	髮筋	挽君	招禿	小雀	大風	萩花	清穗	露細	月丸	畫書	芥子	煤拂	主従	火難	師走
緒猫	綱鬼	二艇	三絃	寝家	通路	散見	掉狐	碎溪	同異	有苦	無餘	屋前	更後	地震	市中
跑	繫	繫	撥	敵	障	毛	尾	濤	國	勞	念	嗽	更	騒	市

素 全 知 全 素 全 知 全 素 全 知 素 全 知 全 素

幾 堂

雅^ニ子^ニ待^ツ宮^ノ箒^ノ
 敗^レ軍^ヲ折^リ月^ノ骨^ノ
 虫^ノ匍^ク非^ニ敢^テ後^ヲ
 鴈^ノ字^ヲ有^ニ何^カ教^ヘ
 花^ノ不^レ言^フ當^ニ
 梅^ノ無^シ落^シ落^シ撈^フ
 流^シ波^ヲ盡^ス曲^ヲ
 已^ニ滿^ニ屋^ノ應^ニ涸^ニ
 鮓^ノ鮓^ノ金^ノ砂^ノ子^ノ
 鰻^ノ鮓^ノ鎚^ノ鐔^ノ刀^ノ
 薩^ノ摩^ノ男^ノ立^ニ髯^ヲ
 高^ノ野^ノ聖^ノ商^ノ毫^ノ
 要^ニ要^ニ扇^ヲ根^ノ本^ノ
 釘^ノ釘^ノ箱^ノ板^ノ擗^ニ
 茶^ノ壺^ノ千^ノ兩^ノ物^ノ
 酒^ノ器^ノ五^ノ文^ノ匏^ノ
 枕^ノ石^ノ而^ニ衾^ヲ草^ヲ
 的^ノ山^ノ兮^ノ矢^ノ蒿^ノ
 月^ノ提^ニ常^ノ住^ニ餅^ヲ
 露^ノ毀^ニ施^ニ行^ニ饅^ヲ

素全知全素全知全素全知全素全知全素全知素

薄^ニ瘦^ニ小^ノ町^ノ果^ノ
 蘭^ノ粧^ヲ褒^ニ奴^ヲ敖^ニ
 麒麟^ノ羹^ヲ鳳^ノ炙^ヲ
 編^ノ蝠^ノ袴^ヲ鸚^ノ鵒^ノ袍^ヲ
 木^ノ偶^ノ人^ノ勤^ニ在^ニ
 伽^ノ羅^ノ佛^ノ位^ノ高^ノ
 隱^ニ居^ニ時^ノ釣^ニ理^ニ
 緩^ニ步^ニ或^ニ騎^ニ聲^ヲ
 老^ノ子^ノ非^ニ常^ノ耳^ノ
 達^ノ摩^ノ破^ニ坐^ニ瓦^ノ
 念^ニ經^ニ朝^ノ暮^ノ役^ノ
 論^ニ義^ニ古^ノ今^ノ交^ニ
 差^ニ紙^ノ着^ニ花^ノ月^ノ
 捻^ニ糸^ノ卷^ニ柳^ノ暴^ニ
 素^ノ知^ニ素^ノ全^ノ知^ニ素^ノ全^ノ知^ニ素^ノ全^ノ知^ニ素^ノ全^ノ知^ニ素^ノ

(この巻の第二句「火種」の二字を缺
 字とせる板本あり。素堂が數次類焼
 の厄に遭へるを忘みて削りしならん。
 今別本によりて之を補ふ。)

寒^ノ梅^ノ魁^ヲ出^ス鋪^ヲ
 雪^ノ竹^ノ折^リ成^ス筍^ヲ
 茶^ノ煮^ニ叩^ニ居^ニ睡^ニ
 餅^ノ麩^ノ助^ニ困^ニ窮^ニ
 謠^ノ聲^ヲ皆^ニ歷^ニ
 仰^ニ旨^ニ最^ニ中^ニ
 世^ノ界^ノ挑^ニ燈^ノ月^ノ
 天^ノ河^ノ寫^ニ繪^ノ霧^ノ
 鹿^ノ鳴^ヲ怨^ニ獨^ノ寐^ノ
 虎^ノ慕^ニ歎^ニ十^ノ終^ニ
 敵^ノ討^ニ狂^ノ言^ノ切^ニ
 男^ノ振^ニ乘^ノ物^ノ供^ニ
 投^ニ錢^ノ爲^ニ買^ニ喰^ニ
 橫^ニ戟^ノ好^ニ平^ノ攻^ニ
 猪^ノ武^ノ者^ノ商^ノ反^ニ
 魚^ノ商^ノ人^ノ足^ニ忠^ニ

知全素全知全素全知全素全知全素知

俳聯五十韻

堂 幾

知全素全知全素全知全素全知全素全知全素知

知素知全素全知全素全知全素知

(この巻ウ五句目「買喰」は「買喰」の誤記ならん。)

かつしかの素堂老人家の集ありてひめ置
れけるが、後後いかなる手よりか洩けむ
書肆御山房今あらたに彫刻せんとす。こ
れを見れば、はじめに初茶の湯の句あり。
さるによつて世にとくゝの句合と
稱す。又一本あり。茶隱士菊道人の俳の
名をまうけて三口一舌とよぶ。往々た
がひある中に、老の春簾麝の秋の句あり。
いづれの書賈眞偽のわかもなけれど、
此二章を發端として追加歌仙となしぬ。
されば序次にある所の御愛濯川宮川の其
ながれを結ばんの微意歟。

老の春初はなげぬき今からも
今からも又園に呼接よびあは宗瑞
猫なしにしかも胡蝶を遊ばせて
麥阿

にほひハツ／＼と木葉を干す	素丸	腹掛になるほど綾の裁はづれ	阿	酒もりに月を出て見ぬ人もなし	珪琳
あちらへもこちらへも橋の朝の月	咫尺	路次からもゝる雨の空灶 そたき	丸	これも殿からわたる燭臺	宗瑞
鱈もたせて人を尋る	珪琳	我事のやうに御供の物おもひ	尺	川風に關所の障子びり／＼と	素丸
弓取のまだ新米に有つかず	瑞	銅鑊へ星のちら／＼	琳	葱を洗へば鴨は羽た／＼	麥阿
御縁は深い志貴の毘沙門	阿	初月の出るとなくなる和田峠	瑞	どなたへも今は頭巾をとらぬ也	尺
傘をかざせば婆のうれしがる	丸	餅屋の戸さへ立て秋風	阿	勸進能のけふの鉢の木	琳
残んの蕎麥の白き十月	尺	蛭の聲はきらひな抱瘡神	丸	水茶屋がこれは煙たい馳走ぶり	阿
遅牛の呵られながら唄つたひ	琳	大僧正の不便 ふびん がらしやる	尺	待テどくらせど郭公まだ	丸
ようは寺地に見立給ひし	瑞	降雪のとにけふから寒の入	琳	夏書 なつがき する机に誰が文じややら	瑞
泊つても夜寒がらせぬ金屏風	阿	屋敷の金の出さうでは出ぬ	瑞	いもうと君もともに朝起	尺
舅の前に月もかたぶく	丸	町の衆に歌人／＼となぶられて	阿	九日は門の淋しい節句にて	琳
どつかりと下がる今年の綿相場	尺	又この春も旅をしたがる	尺	奴と見ゆる居風呂の月	阿
佐田の鳥居もすぐ通りする	琳	一面に櫻の咲てあたゝかさ	丸	守山は鳥も寝れば鶺鴒 けり も寝る	尺
飯櫃をきつね見送る畑の花	瑞	柳のもとにのり捨し馬	琳	いつものころの鉦たゝき坊	瑞
春やむかしの勤奉公	阿			怖 おそ いでも若子は花を折たがる	阿
かけろふのはかたき諷誦 ふうじゆ を作られた	丸			土筆だらけに社家の古庭	丸
六疊敷の隅に樽酒	尺			幾春敷訴訟に出たり戻ツたり	琳
隠れてもまだ何所やらに大晦日	琳	土佐が繪の彩色 はなざし 元し須磨の秋	堂	でんがく法師の飛 た だ世の中	瑞
あれを屈へば子が付て来る	瑞	日は入はてゝうそ寒き松	咫尺	吸物は藻に埋るゝ玉かしは	丸

下 合句のくくと

享保二十年乙卯正月

杉浦三郎兵衛藏